

◎報告

呼吸器疾患に対する温泉療法
—再入院症例を中心に—西村 伸子, 寺崎 佳代, 山本 貞枝,
吉尾 慶子, 中村寿美江

岡山大学医学部付属病院三朝分院看護部

要旨

2000年1月～12月までの1年間に当院へ入院した呼吸器疾患のうち、気管支喘息99例と肺気腫47例を対象に、年齢・入院期間・入院の理由・再入院率を疾患別・県内外別に比較検討を行った。年齢では気管支喘息よりも肺気腫の方が、また県内外別では県外よりも県内の方が年齢層が高い傾向であった。入院期間では気管支喘息・肺気腫とも60日未満の入院期間の症例が多く見られた。入院の理由では気管支喘息・肺気腫とも県内症例においては急性増悪例が、また県外症例においては症状の改善を目的とした入院が多い傾向であり、再入院率は両疾患とも県内症例に比べ県外症例の方がより高い傾向であった。このことから、当院の再入院症例を中心とした呼吸器疾患に対する温泉療法の傾向として、県内症例の再入院の理由の多くは急性増悪であり、遠隔地からの入院症例では症状の改善を目的とした入院が主要な理由であった。

索引用語：気管支喘息，肺気腫，再入院，急性増悪，症状の改善

key words : asthma, emphysema, readmission, acute exacerbation, improvement of symptoms

はじめに

当院は、岡山大学付属病院の分院として温泉地に開設され、永年温泉治療・研究に取り組んでいる。開設以来、リウマチ、腰痛などの慢性疼痛性疾患に温泉治療が行われており、20年前からは呼吸器疾患に温泉治療が取り入れられ、効果が報告されている。その効果により、最近では遠隔地からの入院症例が増加し、さらに遠隔地の再入院症例が増加傾向にある。

今回は、気管支喘息と肺気腫の入院症例を対象に、年齢、入院期間、入院の理由、再入院の割合を、疾患別、県内外別に比較、検討した。その結果、若干の傾向が見られたので報告する。

方法

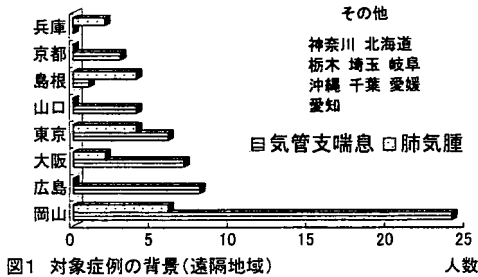
1. 調査期間 2000年 1月～12月
2. 対象及び方法

①上記期間に入院した呼吸器疾患のうち、気管支喘息99例と肺気腫47例を対象に、年齢・入院期間・入院の理由・再入院率を疾患別・県内外別に比較検討した。

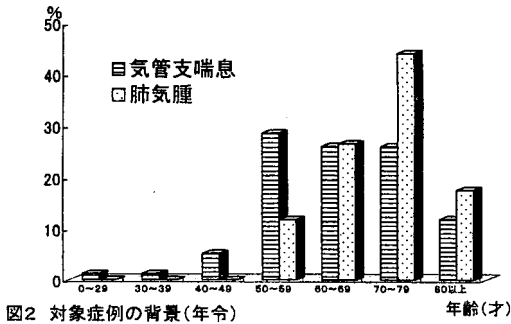
②入院の理由は入院時の症状で急性増悪・
症状の改善・その他に分類した。

結 果

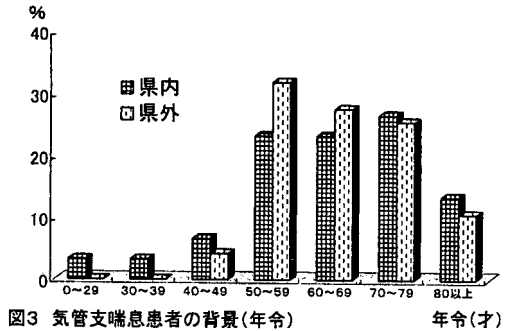
対象症例を地域別に見ると、県内が61例と県外が85例であり、県外である遠隔地からの来院が多く見られた。遠隔地としては、近県である岡山が最も多く30例、次いで東京10例、広島8例、大阪7例が多く、その他遠くは北海道から沖縄まで全国17都道府県に及んでいた(図1)。年齢別では、



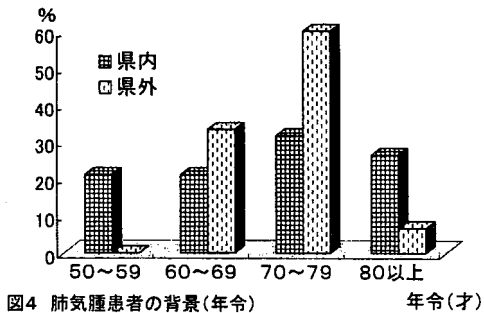
気管支喘息症例は、50才代(28.6%)、60才代(26%)、70才代(26%)が多く、肺気腫症例は、70才代が最も多く44.1%を占め、次いで60才代(26.5%)であった(図2)。気管支喘息よりも肺



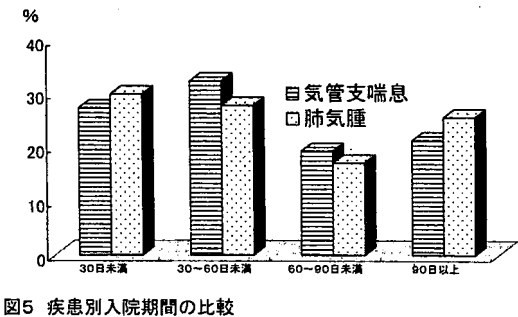
気腫の方が年齢層が高い傾向であった。県内外で比較すると、気管支喘息は、県内では70才代(26.6%)が多く、次いで50才代(23.3%)、60才代(23.3%)であり、県外は50才代(31.9%)が多く、次いで60才代(27.6%)、70才代(25.5%)であった。県内よりも県外のほうがより年齢層が低い傾向であった(図3)。一方肺気腫では、県



内は70才代(31.6%)、80才代(26.3%)と高齢者が多く、県外は70才代が最も多く60%を占めていた(図4)。次に、入院期間別では、気管支喘



息は30日~60日未満が32.3%、30日未満が27.2%、肺気腫は30日未満が29.8%、30日~60日未満が27.7%を占めており両疾患とも30日未満と30日~60日未満の入院期間の症例が多く見られた(図5)。



県内外別では気管支喘息の県内症例の30日~60日未満が37.8%、30日未満が32.4%、県外症例においては30日~60日未満が29%、90日以上が25.8%、30日未満が24.2%とあまり差は見られなかった。

一方肺気腫では、県内症例は90日の入院期間が33.3%、ついで30日未満が29.2%、県外症例は30日未満と30日～60日未満がそれぞれ30.4%をしめていた。両疾患とも県内外別による入院期間の差は認められなかった。入院の理由としては、喘息や肺気腫などの症状が呼吸器感染症や季節の変動などにより急性に増悪した症例を急性増悪例とし、一方現在の症状は安定しているがより症状改善することを期待して入院した症例を症状改善例とした。その他は検査目的あるいは他の疾患が主病名のものでした。気管支喘息では、県外の症状改善例が最も多く66.1%、次に県内の急性増悪例が45.9%、ついで県内のその他の症例29.7%、県内の症状改善24.3%であった(図6)。肺気腫においては県外の症状改善例が95.6%と圧倒的に多く、

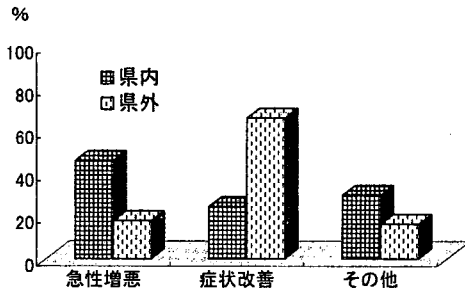


図6 入院の理由(気管支喘息)

ついで県内の急性増悪例が66.6%を占めていた(図7)。次に再入院の割合は、111例中35例(県内

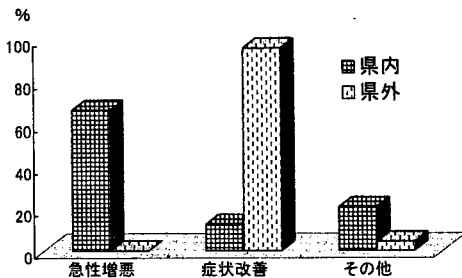


図7 入院の理由(肺気腫)

12例、県外23例)の31.5%を占めていた。これを疾患別にみると、気管支喘息は県内が30例中7例の23.3%、県外が47例中15例の31.9%であり、肺気腫は県内が19例中5例の26.3%、県外が15例中

8例の53.3%を占めていた。いずれの疾患も県内からの入院症例に比べ県外からの入院症例の再入院率がより高い傾向であった。なお3回以上の再入院症例は気管支喘息5例、肺気腫3例であった。

考 察

当院の呼吸器疾患の入院症例の特徴として谷崎は①遠隔地からの来院が多い ②年齢層は50才以上がほとんどであり、年齢別にみると70才代が最も多く高齢化の傾向にある ③再入院が多い傾向である¹⁾と述べている。

2000年1月から12月までの一年間の気管支喘息と肺気腫の入院症例146例の背景においても同じ傾向が示された。すなわち鳥取県内より県外である遠隔地からの来院が多く85例(58.2%)を占めていた。遠隔地としては岡山、東京、広島、大阪の順に多く、その他北海道から沖縄まで17都道府県に及んでいた。全国各地からの症例が多い理由は、昨年のアンケート²⁾によりテレビ・新聞・雑誌等のマスコミの情報によって当院のことを知り、今までの薬物治療に限界を感じ最後の手段として温泉療法を取り入れた当院の治療を求め、遠隔地からでも来院していることがわかった。年齢別では気管支喘息、肺気腫とも50才以上の症例が95.9%をしめていた。疾患別で比較すると、気管支喘息は50才代が28.6%、60才代が26%、70才代が26%であり、肺気腫は70才代が44.1%と最も多く占めており、肺気腫の方が年齢層が高い。そして県外症例の70才以上が肺気腫では66.6%を占め、一方気管支喘息では36.1%を占めており遠隔地からの高齢者の来院が多い傾向であった。入院期間別では両疾患とも60日未満の入院期間の症例が多く見られた。肺気腫の90日以上入院期間症例が多い傾向であるが、肺気腫は高齢者が多いため重症化しやすく、他疾患の合併もあり入院が長期になりやすいためである。次に再入院については111例中35例の31.5%を占めていた。このうち県外は23例(65.7%)であり、両疾患とも県内からの入院症例に比べ県外からの入院症例の再入院率がより高い傾向であった。前述のアンケート結果

でも再入院が39.4%を占めており再入院症例が多い傾向であることが示された。また再入院の理由として、効果があった温泉治療に温泉プール訓練・鉱泥湿布治療・吸入療法をあげており、これらの治療が他施設にないことから再度来院していることがわかった。気管支喘息症例においては、発作で入退院を繰り返し今までの治療が点滴・安静治療であったのに比べ、当院は温泉治療を中心にした動きのある治療であり、結果的には体力がつき体調のコントロールができる自信につながっている。そして社会復帰した後も更に症状の改善のため再入院する例が多い。入院の理由としては、症状改善目的は、気管支喘息の県外症例が66.1%を占めており、肺気腫においては同じく県外症例が95.6%と圧倒的に多く占めていた。一方急性増悪例においては、気管支喘息の県内症例が45.9%、肺気腫の県外症例が66.6%を占めていた。

谷崎は「気管支喘息や肺気腫などの慢性に経過する疾患では、自分で病気をある程度コントロールしていくことが重要であり、すなわちこのセルフマネジメントを上手に行いながら、ときどきその病態が安定しているかどうかチェックする必要もあり、あるいは症状が増悪しているものであればそれを改善させる必要もあって、反復入院の必

要性や意義は十分あるものと考えられる¹⁾。」と述べており、以上の結果はその指導効果の現れであり、今後も再入院が増加するものと思われる。

遠隔地からの入院症例、再入院症例、高齢者症例に対する問題点を考慮しながら、温泉治療目標に到達するため、よりよいかかわり、看護援助を行っていきたい。

参考文献

1. 谷崎勝朗, 御船尚志, 光延文裕, 他: 呼吸器疾患に対する温泉療法. 最近7年間の入院症例999例を対象に. 岡山大学三朝分院研究報告 71; 1-9, 2000.
2. 西村伸子, 寺崎佳代, 山本貞枝, 他: アンケート調査による温泉療法の評価—遠隔地からの入院患者を対象に—. 日本温泉気候物理医学会雑誌 64; 33, 2000.
3. 谷崎勝朗: 現代医療における温泉療法の意義とその社会的要請. 岡山大学三朝分院研究報告 63; 110-116, 1992.
4. 谷崎勝朗: 喘息の温泉療法. 近代文芸社 1994.